

2020 年 9 月 1 日

2020 年度 2 学期始業式 式辞

副校長 竹山 幸男

「平和の福音と 1 枚のタオル」―戦後 75 年戦争と平和を考える

2020 年の夏。連日の猛暑と新型コロナウイルス感染症の中での特別な夏を終えて、予定通りこの 2 学期の始業式を迎えられたことを心より感謝いたします。新型コロナウイルス感染症については、この夏の間も感染が拡大し、京都府の発表によれば、市中感染等も心配されている状況ですので、注意・警戒を続けておく必要があります。夏休み中にもありましたが、状況によっては、急に登校停止（自宅学習日）となる場合もありますので、緊急メール配信を日々確認してくださいよう生徒の皆さんにもお願いいたします。

さて、2020 年は戦後 75 年の年。8 月 15 日は 75 回目の終戦記念日でした。テレビでは、いろいろな特集番組を放映していましたが、本日は、8 月 9 日の長崎の原爆のできことを通して、戦争と平和のことを皆さんとともに考えてみたいと思います。

8 月 9 日の朝の NHK の番組で「長崎原爆の絵」（NHK 長崎放送局制作）という番組が放映されていました。被爆者の方々が、その日のことを思い出して描かれた 1 枚 1 枚の絵。被爆の体験をされた方一人ひとりが、そのときの恐怖を思い出しながら絞り出すような気持ちで描かれたものとして、気持ちを込めて見なければならぬと語られていました。

本日、最初のスライドで紹介しているこの絵（右図）は、山口カズ子さん（92 歳：長崎バプテスト教会員の方 ※学徒動員世代は現在 90 歳前後になっておられます。）が書かれたものです。これから見ていく紙芝居は、山口さんの次女：小林裕子さんが創られたもので、NHK の番組でも日曜学校で子どもたちに紙芝居で語られている姿が映されていました。



「これはカズ子おばあさんの子どものころのお話です」



「かず子の家は、おかあさんと二人のいもうとの四人かぞくです。おかあさんは、夜おそくまでしごとをして、かずこと二人のいもうとをそだてていました。」

「ある日、おかあさんはかずこを呉服につれて行き、きれいなぬのをかいました。早く戦争が終わって、きれいなきものをかずこに着せてあげたかったのです。」

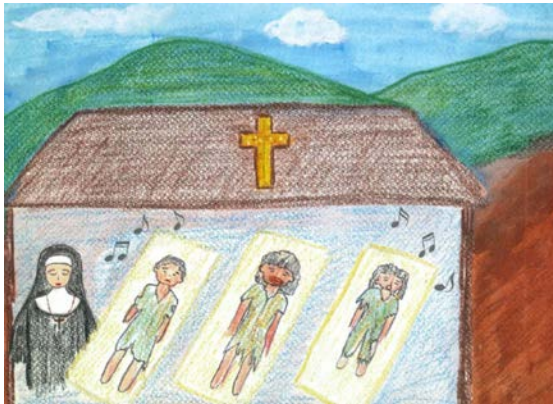


「しかし戦争は日に日にはげしくなっています。昭和二十年八月九日のあさ、かずこは『今日もあつくなりそうだなあ』と空をみあげ仕事場に向かいました。」(そのころ、女学生は学校で勉強はなく軍需工場に通っておられました。)'その日の十一時二分、目のまえをぴかっと光がはしり、かずこは何もわからなくなりました。」

「気がついたときは、ざいもくのしたじきになっていました。むがむちゅうではい出したかずこの目の前に広がっていたのは、おそろしいこうけいでした。」(殺気だった怪我をした人がどんどん逃げようとしてきています。)'女の人が『あなた、かおが真っ黒よ、これでふきなさい。』と一枚のタオルをくれました。」



（何とも言えないにおい。タオルで口や鼻をふさぎ、カズ子さんも逃げていきます。列車に乗って諫早の避難所に向かいました。）「かずこはタオルを口にあって、避難所へ行きました。やけどをおったかずこは、シスターに毎日看病してもらいました。」



（腕から肉が落ちるくらいの大きなけがをしていたので自分は助からないと思っておられました。）
「ある夜、きれいな讃美歌の歌声が聞こえてきました。シスターは生徒がなくなると、賛美して天国にみおくるのです。となりにねていた子も、つぎつぎに亡くなっていきました。」（無傷の人がつぎつぎ亡くなられていきました。）「かずこはあのタオルを口にあって、わるい空気（原爆のガス）をすわなかったからでしょうか。きせきてきに元気になっていきました。」



「でも、おかあさんと妹たちには二度と会えませんでした。戦争が終わり、かずこは今おばあさんになりました。ふたたび、戦争をしてはならないと心から思っています。」

そして考えました。「一枚しかなかったタオルを私に差し出してくれた女性はどうなったのだろう。」自分の人生の目標として、「私もそういう人になりたい。」と思ったそうです。「自分と同じようなつらい思いをする人が二度とないように、『いのち』を考えるコロナ下の状況だからこそ、原爆、戦争と平和のことを伝えていく必要がある。」と語られていました。

今年の8月9日の朝は日曜日でした。私がいつも通っている教会も、今はオンライン礼拝なっています。その礼拝に参加して、午後には、長崎バプテスト教会のホームページ(<http://www.being-nagasaki.jp/>)を拝見しました。すると、8月9日の朝の礼拝が録画されており、視聴することができました。礼拝のタ

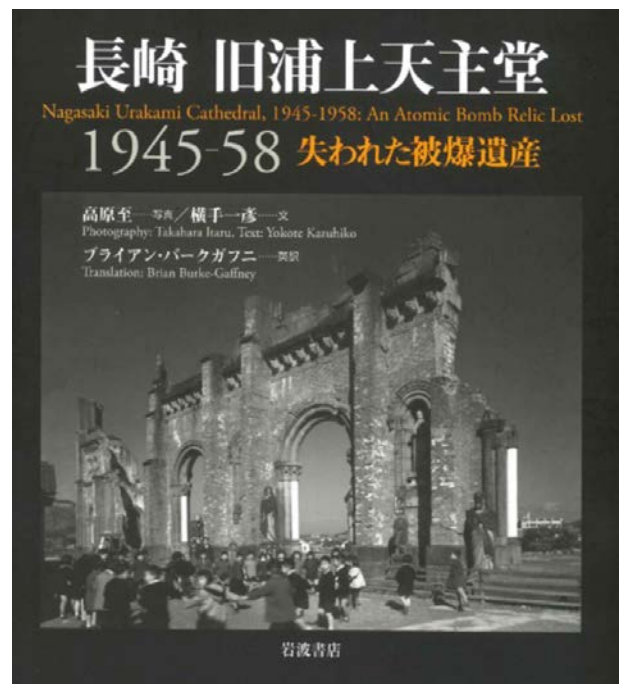
イトルは、「平和の福音と1枚のタオル」(ピリピ書2章6～8節)。このタイトルを本日の始業式でも用いさせていただいていますが、ちょうど礼拝の冒頭に、テレビで私の見た山口カズ子さんの描かれた絵を紹介しながら、長崎バプテスト教会の牧師先生である曹 銀珉(チョ ウンミン)先生がメッセージを語られていました。

イエス・キリストによる十字架の福音は、神様と平安と平和をもたらすものです。私たちの罪の身代わり、犠牲によるイエス様の十字架。その十字架による救い。イエス様がわざわざ私たちのために、この世に来られ、犠牲になられたこと。このイエス様が十字架の上で成し遂げられた和解、平和の働きがあるから、私たちもまた和解、平和の働きをすることができるのです。その中心には、神様、イエス様の愛があります。

このメッセージを録画で拝見して感激し、お会いしたことのない牧師先生でしたが、「ぜひ2学期の始業式のお話でご紹介させていただきたい」と書いてメールを送ると、さきほど紹介した紙芝居や手記をわざわざ送ってくださいました。(オンラインの効力は本当にすごいものですね。)

もう1つ、NHKスペシャルで、長崎の原爆のことが紹介されている番組を見る機会がありました。番組では、原爆投下から1か月間の長崎の様子がカラーフィルムを交えて紹介されていました。アメリカ人のレポーターが、「長崎では信じられない光景を見た。東洋の大聖堂と言われた浦上天主堂が崩壊。」と伝えます。この本の写真を見てください。(右図)これが原爆の被害を受けた浦上天主堂の写真です。原爆の遺構というと、皆さんは広島「原爆ドーム」のことを思い浮かべると思うのですが、この写真はあまり見たことがないと思います。全世界では、キリスト教会、クリスチャンの方が多いため、もしこの傷ついた天主堂が残されていれば、核兵器・原爆の恐ろしさを知らしめるのにとてもインパクトの強い、影響力があるものとなっただろうと思います。皆さんもご存じの通り、1945年8月9日の原爆攻撃の第一目標地点は、八幡製鉄所のあった小倉であって、長崎ではありませんでした。小倉上空が雲で覆われていたため、急きょ変更となったようです。そして長崎の当初の目標地点は、少し南の三菱の工場だったので、天主堂のあった浦上上空ではありませんでした。一説によれば、戦後傷ついた天主堂が遺されず、建て替えられたのは、キリスト教会の多いアメリカ、ヨーロッパで「なぜここをねらったのか」という批判が出てくることを恐れ、アメリカのイメージが悪くなるのを避けたのではないかと、とも言われています。

アメリカ人レポーターが見た「信じられない光景」は、長崎の惨状とともに、「苦しみ、痛みの中でもクリスチャンの方々が毎日夕方ミサで祈っている姿」だったと言います。「こんなにひどい目にあったことへの憎しみではなく、なぜ祈れるのか。」祈りの姿を見て、最初は腹が立ったと言います。「こんな惨状(ひどいこと)を許した神様になぜ祈れるのか。」しかし、その祈りが毎夕続けられていることを見て考



えが変わったと言います。この祈りは、「原爆を投下してしまった人類の罪に対する祈り」、「こんなにひどいことが起きてしまった、原爆を投下してしまった人々を含めての贖罪の祈り」ではないかと考えるようになったそうです。番組の終わりには次のような語りかけがありました。

「世界の大都市に住む多くの人々は、広島、長崎の原爆よりもっと威力のある核兵器によって、今では一瞬のうちにいのちを失い、都市も突然壊滅して人が住めない不毛の地となる。私たち一人ひとりが、本気で核兵器をコントロールすること、核兵器を廃棄し、その使用を止めていかないと、地球全体にも影響を及ぼし、取返しのつかないことになる。」

75年前のことではなく、私たち一人ひとりの目の前にある差し迫った問題であることを強く感じました。

今年、2020年の「長崎平和宣言」の中で、田上長崎市長は「新型コロナウイルス感染症、地球温暖化、核兵器の問題に共通するのは地球に住む私たちみんなが『当事者』だと言うことです。」と語り、若い世代に問いかけました。「あなたの未来に核兵器は必要ですか。」と。

75年前、突然、長崎と広島の人々が原爆の脅威にさらされました。そして、今年、突然、私たちが新型コロナウイルスが襲ってきました。歴史上、戦争も疫病も繰り返されてきています。これからの核廃絶は、私たちが想像力を働かせ、いかに『当事者意識』を持てるかにかかっています。昨年（2019年）秋に来日し、ヒロシマ・ナガサキを訪問されたローマ教皇も「核兵器のない世界は希望であり、現実です。世界の皆さんが、その世界をめざして参加していきましょう。」と語られています。



最後に、もう一度、山口カズ子さんの描かれた絵を見てみましょう。



山口さんに手渡された一枚のタオル。その場で差し出された女性の思い、犠牲があったものと思います。実際にあったこのお話を通して、争いではなく、対話をするための犠牲は何かを考え行動すること。そして、聖霊の導きにより信仰によって平和を創り出す力が与えられることを祈っていきましょう。そして、私たちに神様との和解と平和、平安をもたらすために、この世に来てくださり、私たちを愛してくださったイエス様とともに、毎日の生活を歩んでいけるようにお祈りしていきたいと思います。紙芝居の最後は次のように締めくくられています。

「私たちは、今戦争のない日本に生かされて、平和の中にあります。これがどれほどかけがえのない大切なことか心に刻み、祈ります。神は『人を愛されるため、そして互いに愛し合って平和に過ごすために生まれたのです。』と教えてくださいました。私たちの生きる意味もここにあると思います。」

今私たちが手にしている日本国憲法 9 条がそのスピリットに立っています。この思い、平和のバトンをしっかりと次世代に引き継いでいくためにも、私たちがナガサキ・ヒロシマの原爆のことを含め、戦争と平和の体験を語り継いでいかなければなりません。「戦後 100 年」を皆さんが平和のうちに本当に迎えることができるためにも。

「イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二もこれと同じように重要である。

『隣人を自分のように愛しなさい。』」（マタイによる福音書22章37節～39節）

「受けるよりは与える方が幸いである。」（使徒言行録20章35節）

「平和を実現する人々は、幸いである、

その人たちは神の子と呼ばれる。」（マタイによる福音書5章9節）

561

社会・国・世界 平和を求めて

[1420]

God of the nations, near and far
詞：John H. Holmes, 1879—1964

ST. AGNES
曲：John B. Dykes, 1823—1876

1 へいたわをものことめてあゆむたみをは
2 たたかえいるのこはくはまもひびを
3 とだせしでてはくつづけひいこう、
4 あてらしとてくはくひとひの
5 えてらしとてくはくひとひの

しゅくしてください、せかいの主よ。
よのやみをたつとめり、なほとどろく。
へいわをばぶきよわを、はばむやみ。
きずなは武器より、さらに強い。
この世の平和を、阻む闇を。

（♩=106）

- 1 へい^{へい}わ^わを^もとめ^{あゆ}て^{たみ} 歩む民を
祝^{しゅく}してください、世^せ界^{かい}の主^{しゅ}よ。
- 2 たた^{たた}か^かこ^こえ^えは^{いま} ひび^{ひび}
戦^{いくさ}いの声^{こゑ}は 今^{いま}も響^{ひび}き
夜^よの闇^{やみ}をついて なおとどろく。
- 3 とだ^{とだ}え^えることなく つづ^{つづ}けてい^いこう、 ♪ 6 あた^{あた}て^てく^くだ^ださい、世^せ界^{かい}の主^{しゅ}よ、
へい^{へい}わ^わを^もとめ^{あゆ}て^{たみ} 話^{はな}し^あひを。
- 4 あせ^{あせ}は^はたら^{たら} ひと^{ひと} ひと^{ひと}
汗^{あせ}して働^{はたら}く 人^{ひと}と人^{ひと}の
きず^{きず}な^なは武^ぶ器^きより さ^さら^らに強^{つよ}い。
- 5 て^て照^てら^らし^してく^くだ^ださい、せ^{せい}れい^{れい}の^{ほのお}炎^{えん}、
こ^この^よ世^よの^{へい}平^わ和^わを^は阻^{さまた}む^か闇^{やみ}を。

詩24：1 イザ9：6 ルカ1：79 IIテサ3：16

次の、2019年度「長崎平和宣言」に掲載されている詩が、山口カズ子さんのものです。

長 崎 平 和 宣 言

目を閉じて聴いてください。

幾千の人の手足がふきとび
腸わたが流れ出て
人の体にうじ虫がわいた
息ある者は肉親をさがしもとめて
死がいを見つけ そして焼いた
人間を焼く煙が立ちのぼり
罪なき人の血が流れて浦上川を赤くそめた

ケロイドだけを残してやっとな戦争が終わった

だけど……
父も母も もういない
兄も妹ももどってはこない

人は忘れやすく弱いものだから
あやまちをくり返す
だけど……
このことだけは忘れてはならない
このことだけはくり返してはならない
どんなことがあっても……

これは、1945年8月9日午前11時2分、17歳の時に原子爆弾により家族を失い、自らも大けがを負った女性がつづった詩です。自分だけではなく、世界の誰にも、二度とこの経験をさせてはならない、という強い思いが、そこにはあります。

原爆は「人の手」によってつくられ、「人の上」に落とされました。だからこそ「人の意志」によって、無くすことができます。そして、その意志が生まれる場所は、間違いなく、私たち一人ひとりの心の中です。

今、核兵器を巡る世界情勢はとても危険な状況です。核兵器は役に立つと平然と公言する風潮が再びはびこり始め、アメリカは小型でより使いやすい核兵器の開発を打ち出しました。ロシアは、新型核兵器の開発と配備を表明しました。そのうえ、冷戦時代の軍拡競争を終わらせた中距離核戦力（INF）全廃条約は否定され、戦略核兵器を削減する条約（新START）の継続も危機に瀕しています。世界から核兵器をなくそうと積み重ねてきた人類の努力の成果が次々と壊され、核兵器が使われる危険性が高まっています。

核兵器がもたらす生き地獄を「くり返してはならない」という被爆者の必死の思いが世界に届くことはないのでしょうか。

そうではありません。国連にも、多くの国の政府や自治体にも、何よりも被爆者をはじめとする市民社会にも、同じ思いを持ち、声を上げている人たちは大勢います。

そして、小さな声の集まりである市民社会の力は、これまでも、世界を動かしてきました。1954年のビキニ環礁での水爆実験を機に世界中に広がった反核運動は、やがて核実験の禁止条約を生み出しました。一昨年の核兵器禁止条約の成立にも市民社会の力が大きな役割を果たしました。私たち一人ひとりの力は、微力ではあっても、決して無力ではないのです。

世界の市民社会の皆さんに呼びかけます。

戦争体験や被爆体験を語り継ぎましょう。戦争が何をもたらしたのかを知ることは、平和をつくる大切な第一歩です。

国を超えて人と人との間に信頼関係をつくり続けましょう。小さな信頼を積み重ねることは、国同士の不信感による戦争を防ぐ力にもなります。

人の痛みがわかることの大切さを子どもたちに伝え続けましょう。それは子どもたちの心に平和の種を植えることになります。

平和のためにできることはたくさんあります。あきらめずに、そして無関心にならずに、地道に「平和の文化」を育て続けましょう。そして、核兵器はいらない、と声を上げましょう。それは、小さな私たち一人ひとりにできる大きな役割だと思います。

すべての国のリーダーの皆さん。被爆地を訪れ、原子雲の下で何が起こったのかを見て、聴いて、感じてください。そして、核兵器がいかに非人道的な兵器なのか、心に焼き付けてください。

核保有国のリーダーの皆さん。核不拡散条約（NPT）は、来年、成立からちょうど50年を迎えます。核兵器をなくすことを約束し、その義務を負ったこの条約の意味を、すべての核保有国はもう一度思い出すべきです。特にアメリカとロシアには、核超大国の責任として、核兵器を大幅に削減する具体的道筋を、世界に示すことを求めます。

日本政府に訴えます。日本は今、核兵器禁止条約に背を向けています。唯一の戦争被爆国の責任として、一刻も早く核兵器禁止条約に署名、批准してください。そのためにも朝鮮半島非核化の動きを捉え、「核の傘」ではなく、「非核の傘」となる北東アジア非核兵器地帯の検討を始めてください。そして何よりも「戦争をしない」という決意を込めた日本国憲法の平和の理念の堅持と、それを世界に広げるリーダーシップを発揮することを求めます。

被爆者の平均年齢は既に82歳を超えています。日本政府には、高齢化する被爆者のさらなる援護の充実と、今も被爆者と認定されていない被爆体験者の救済を求めます。

長崎は、核の被害を体験したまちとして、原発事故から8年が経過した今も放射能汚染の影響で苦しんでいる福島の人々を変わらず応援していきます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げ、長崎は広島とともに、そして平和を築く力になりたいと思うすべての人たちと力を合わせて、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2019年（令和元年）8月9日

長崎市長 田上 富久